

ラウンドテーブルB

「世話・人情話・メロドラマ」報告

木 越 俊 介

《司会者》

木越 俊介（国文学研究資料館）

《発表者》

今岡謙太郎（武蔵野美術大学）

佐藤 至子（日本大学）

加藤 敦子（都留文科大）

板坂 耀子（福岡教育大学名誉教授）

本テーブルのテーマ（趣意）については前号（一〇五号）に掲載されているので、ここで繰り返すことはできるだけ避け、企画の背景などについて補足しながら、何をねらいとしていたのかを記しておきたい。

今回、議論の核としたかったのは、江戸時代に生み出された演劇（歌舞伎・浄瑠璃）、舌耕、小説などの中に描かれる道徳・倫理と感情の問題である。これは既に論じ尽くされた観がある

問題かもしれないが、ともすれば近代的な心理描写との優劣や、逆にそれとの部分的な連続性を重視されることが多かったのではないだろうか。江戸時代に特有の感情の描写・表出が存するとすれば、その魅力を探るとともに、今の世の人々に説明するにあたっての適切な言葉や方法を模索してみたい。これがそもその出発点であった。この問題を再検証するために、まずは江戸時代の文芸における人や感情の描き方を、「世話」という枠の中で考察することを起点としてみた。なお、ここでいう「世話」とは、世話性を有しているという程度の、ややゆるやかな範囲で捉えている。

一方で、話が漠然としたものにならないよう、ある程度議論の基軸が必要となる。そこで、「世話」に加え、「人情話」、「メロドラマ」というさらに二つの柱を設けてみた。人情「話」という表記は、「咄」「噺」といったジャンルではなく、人情を扱った話全般を広く扱うことを意図してのものである。一方、

メロドラマは参照項として提示したもので、後述する先行研究を踏まえることで何か新しいものが見えてくる可能性を期待した。具体的な議論の方向性としては、一度視野をできる限り広くとって対象作品をその中に収めてから、翻って個別の作品に戻り、細かな点を検証してみるという手順が望ましいと感じた。

内容的には以上のようなことを考えながら準備したのだが、ラウンドテーブルという場合は、複数の発表によりいくつかの角度から問題を切り取ることが可能であり、こうした大きなテーマを扱うに適していると思われる。ただ、少なくとも司会者としては、ラウンドテーブルはその場、その時間内に何か明確な結論を出すものではなく、むしろ議論の過程が重要であると理解している。試行錯誤を重ねながら、問題設定の適否も含め、多くのことを考えてみる、そういう場になるよう配慮した。実際のラウンドテーブルに際しては活発な議論を促すためにいくつかのルールを定めた。その一つが、一問一答式の質疑応答はしないということ。その場で問題の本質に一步でも近づこうという姿勢を共有することが大切であると思ったからである。当日は冒頭、「キャッチボールというよりは、ビリヤード方式で、場にある複数の玉をみんなで打っていく」というイメージを提示した。もう一つは、発表者はお互いに「さん」づけで呼び合うということ。できるだけ相互に話す際の垣根をなくすためである。小手先のことに過ぎないと捉えられるかもしれないが、

研究発表やシンポジウムとの差異を出すためには、やはりそれなりの工夫が必要であると思われる。たとえば、当日の設営の段階でテーブルの配置をまさにラウンド（円卓）にすることが提案され、発表者全員が相互に顔を見合わせ、それを参加者が取り囲むような形態となった。これはラウンドテーブルの基本中の基本なのかもしれないが、改めてこうした場にふさわしい配置であると実感することができた。

本テーブルでは四名に各二〇分の発表をお願いした。以下、当日の順番に沿って、筆者の視点から要点をまとめてみたい（以下、〈 〉内は当日資料からの引用）。

最初の、今岡謙太郎氏による演劇・舌耕芸の視点からの発表は、書き言葉と話し言葉の差異や身体性の問題といった、世話を扱う際の本質的な点を真正面から扱った内容であった。世態人情をどう文字で描くか、文字にならないところが大事になるにもかかわらず、それをどうにか文字化するというのが永遠の課題である、といった点が印象的であった。具体的な作品については、円朝作品のほとんどが世話物であるという指摘や、氏の「明治期の黙阿弥作品に見る『世話物』の展開」『日本文学』64・10（二〇一五・一〇）を踏まえ、明治五、六年あたりに一つの画期を認めつつ、世話そのものの内容が変質していく過程も指摘された。世話が扱う領域と、話芸や身体との親和性の問題を明るみに出す一方、坪内逍遙が円朝・黙阿弥を世態風俗の描写において高く評価したことに言及し、逍遙をはじめとす

る文学者が文字媒体である「文学」として、そこで見出した価値観をどのように表現しようとしたのかという、視野を広げた問題提起がなされた。さらに議論に厚みを増したのは、講談師が自身の講談に春水の『梅暦』からの影響があることを述べた例を、資料をあげて指摘した点であり、文字媒体から演者へと逆の方向性にも目を配った点がとて興味深かった。以上、例外などを言い出せば收拾のつかなくなる本質的な問題に対し、あえて要点を絞り整理しながら、テーブルにおいて考える要素を多く投げかける内容であった。

つづく佐藤至子氏は、「人情噺における〈世話〉」と題し、〈現在でも比較的演じられる機会の多い人情噺と、その原話あるいは類話にあたる近世小説とを比較し、人情噺において何が重視されているのかを考える〉とした発表であった。具体的には、落語の「火事息子」とその原話として文字に残る「恩愛」〔笑の友〕享和元年刊〕とを比較し、落語の方では父親の葛藤が描かれることを最大のポイントと指摘した。さらにその葛藤に含まれているものを、古今亭志ん朝の噺（一九八一年）を対象に分析し、①世間体を気にする、②息子への愛情（心配）、③自分の期待したものにならなかったことへの怒り、これらが混然とした感情となって表出され、しかも問題自体は何ら解消されない、という点に人情噺の特色を見出した。このように、聴いたり読んだりして感じるもの、読みとれるものをつつ丁寧な拾い上げ言語化していくことは、感情の問題を扱う際に

とても有効であり説得力があると感じた。さらに氏は、『怪談牡丹燈籠』を対象として描写の問題にも切り込み、浅井了意『伽婢子』『牡丹燈籠』との比較から、円朝の描写のきめの細かさに加え、各々の登場人物がある心情に陥ってしまう状況設定の巧みさにも注意を促した。さらに、『白縫譚』の白梅と『真景累ヶ淵』の豊志賀との類似する場面を比較し、「因縁」という外在的な要素を見出した上で、現行の落語ではそこが強調されないことを指摘した。

氏自身のまとめによれば、①ままならない状況に陥るときの感情の発露、これをいかに現実感のあるものとして示していくか。②困難な状況は必ずしも解決されない。必須ではない。③ある状況に陥る理由を因縁などに求めていくことは円朝の作品ではなされていたが、少なくとも今はそれがあまり重視されていない、といった諸点が、人情噺から抽出される世話の問題として提示された。

三番手は加藤敦子氏が「伊右衛門はメロドラマの主人公たりうるか?」と題し、メロドラマ研究の視点から、近世演劇のものと特色を探ろうとする発表を行った。

なお、「メロドラマ」という用語や概念に関して、少なくとも司会・発表の五名の間でズレが生じないよう、以下の三冊を事前に共有しておくこととした。

・ピーター・ブルックス 四方田犬彦・木村慧子訳『メロドラマ的想像力』（産業図書、二〇〇二）

・関肇『新聞小説の時代 メディア・読者・メロドラマ』
(新曜社、二〇〇七)

・ジョン・マーサー、マーティン・シングラール 中村秀之・河野真理江訳『メロドラマ映画を学ぶ ジャンル・スタイル・感性』(フィルムアート社、二〇一三)

ここではこれらの内容にほとんど触れることができないが、いずれの書を通して、「メロドラマ」が一般に考えられている以上に広い分野にまたがるものであり、かつ作品に描かれる感情の問題を考えるにかなり有効な切り口となることが理解できる(具体例をあげれば、美徳の勝利、作中人物と観客の視点の不一致、など)。

加藤氏はこれらのメロドラマ研究を参照しながら、(浄瑠璃・歌舞伎の世話物とメロドラマのモード・感性)について、『曾根崎心中』『心中天の網島』『五大力恋緘』『東海道四谷怪談』を対象に検証を試みたのだが、ことごとくメロドラマの定義からはみ出してしまふ点が興味深かった。逆に朝鮮の『春香伝』がまさにメロドラマの特質を十全に備えていることも指摘された。ここから江戸時代の演劇における独自性が垣間見られ、具体的には、善なる者(美徳)と悪人(悪徳)に二分化されず、曖昧さを有した人物が登場し、メロドラマの定型である「美徳の勝利」という結末に至らない、といった諸点が確認できた。さらに、映画における解釈例として、篠田正浩監督『心中天網島』(一九六九)、深作欣二監督『忠臣蔵外伝 四谷怪談』

(一九九四)の実際の一場面を見ながら、演出や音楽をも含めそこに込められた意図を読み解き、運命的状況に無力な主人公たちが描かれるとともに、観客の俯瞰的視点からペーソスが生じていることが指摘された。

さらにこうした点を踏まえ、『東海道四谷怪談』における伊右衛門について、初演時の状況や演者といった背景をあえて抜きにし、テキストとして読んだ場合に、葛藤し揺れる人物像として解釈できる可能性が提示された。これは単なる近代的な解釈ということではなく、そうした解釈の可能性は何に基づくのか、その根拠を客観的に点検しながら提示された点が新鮮であった。運命的な出来事に翻弄される主人公たちが登場し、そこに救済という要素が含まれ、善悪の対立構図があいまいになつていくという、かなり入り組んだ構造の中で人物が描かれている点に演劇としての特質を見出せる、とまとめられた。

最後に、板坂耀子氏が文学の中に描かれる三つの要素について問題提起を行った。一つ目は「ぬれぎぬ」の問題、(古今東西の文学に、あまねくと云つていいほど遍在する「ぬれぎぬ」がどのようにあらわれるか)について検証するものであった。氏の「歌舞伎にみる「ぬれぎぬ」の話」(『中央公論』二〇一二年八月)には、さまざまに「ぬれぎぬ」が三種に分類されているが、極端に重い負の要素を登場人物がどのように背負い、もしくは背負わされ、またそれが作品中における他者との関わりのうちどのようながみをもたらすか、そしてそのこ

とを通して読者や観客に何を伝えるのかについて言及したものであった。二つ目は、様々な作品にしばしば登場する「恵まれた者」が作中いかなる役割を果たしているか、さらに三つ目は「女性的男性」像の中に、(人々のどのような好み、もしくは社会の実態が反映されているか)を問うものであった。氏の幅広い見識に支えられた壮大な内容であり、簡単にまとめることはできないが、登場人物の境遇や設定における不条理さや不均衡の問題に注目することにより、それらが作品に何をもたらしているか、さらにはそうしたことを作品に要請する社会そのものがはらむ問題をも視野に入れた問いかけとして受けとめた。一概には言えないが、各作品においてこうした不安定な要素が必ずしも安定に向かうものではない点に、ドラマとしての味わいに深みが生まれていようであり、これは先の加藤氏の分析と共鳴する面があると思われる。

ここで休憩を一〇分はさみ、準備された質問用紙をもとに、討論に入った。予定では討論は四〇分であったが、実質二〇分強しか確保できなかった。とはいえ、いずれの質問や指摘も、今回のテーマに対しさらに多くの課題を投げかける濃厚な内容であった。以下、かいつまんで紹介すると、勝又基氏からは、人情描写が語られる際の時間的な長さの問題について、中嶋隆氏からは、西鶴の町人物が「咄」を超えた描出力を有することなどを例に、現実を再現するという点において、文字で書かれた方が描出に優れている場合があること、つまり書記テキスト

の叙述における再現性をどう考えるかという問題が提示された。さらにこの問題に絡んで、ロバートキャンベル氏からは、文政期に藩校の漢文読本として刊行された「訳準笑話」に「火事息子」の別ヴァージョンが漢文として掲載されることが指摘され、そこには父親の葛藤がなく比較的フラットに描かれながら、違和感を感じさせない点を、漢文という書記テキストとどのように関わらせて考えるべきなのか、という問いかけがなされた。

光延真哉氏からは、歌舞伎における「時代」と「世話」は本来一番目、二番目などと混在しており、それを明確に分けようとすることはあくまで史的な把握の要請によるものであつて、果たしてどこまで意味があるのか、という問題提起と、演劇以外のジャンルにおいて「世話」と規定することの有効性はどこにあるのか、という質問が出された。これとも関連して児玉竜一氏からは、こうした演劇における分類は後世に分けられたものであり、各場面や演技、発声などについては時代か世話かは明確な区分として江戸時代にも意識されていたであろうが、作品全体で二つに分けようとするのは研究側の事情などによるものであるという指摘がなされた。最後に大高洋司氏が、このテーブルでの話題が、世話性の強いドラマの中では、葛藤がどのように解決されるかという点に集約されるとし、倫理と人情の間のいかなるバランスの上で解決するかが、作られた時代やジャンルなどに関わり、各文芸の特色をもたらししているのでは

ないか、という意見が出された。

こうした質問に対し、発表者からも多様な見解が示された。その一つ一つをここに記すことは困難であるが、議論は深まりながら、いい意味で多岐にわたる問題が俎上に載せられたことはたしかである。

司会者としての興味からまとめると、葛藤を含め、感情が複数の層として描かれ、読者や観客に提示される点にドラマを生み出す原動力の一つがあるように考えた。その層は、一人の人物のうちにあつたり、複数の人それぞれの感情のぶつかりあいやすれ違いであつたりするのだが、これが江戸時代の道徳や倫理といったある程度固定的なものに對置されることによつて、より相対的、流動的なものとして描き出すことを可能にしているようである。感情そのものを饒舌に説明したり掘り下げたりするのはなく、当時の各ジャンルの様式に適した方法により、感情の複数の断面に対し、外側からどのように光を当てて映し出そうとするか、そこに世話の領域の面白さを解く鍵があると思われた。

以上、できるだけ当日の様子を再現することに努めたが、バランスのとれた報告となっているか、また各発表や質問などを適切にまとめられているか甚だ心もとない。誤解や勘違いがあれば、ひとえに司会者の力不足である。

最後に、全体を振り返つての反省や気付いたことを、今後につなげるための覚え書きとして記しておきたい。

まず、準備段階で予想していたことだが、当日、テーブルの時間が足りず消化不良であつた点は率直に認めざるを得ない。やはり討論に十分な時間が割けるよう、時間の配分には余裕をもたせるべきであつた。

ラウンドテーブルという形式については、共有するテーマについて比較的自由に話すことができる場として、とても有効であると思う。ただし、放談や雑談で終わらないようなまとめりも必要であり、それには、この形式にふさわしいテーマ選択やゆるやかなルールなど、事前の準備を十分にすることが不可欠となる。繰り返しになるが、ラウンドテーブルは参加者全員で試行錯誤していくことに意味があると思う。そこに即効性を求めるのではないものねだりであり、テーブルに参加したり聞いたりすることで、各々の関心に引きつけて何かを持って帰ることができれば、十分に意義のあることと思われる。そして、発表者も含め参加者各々がテーブルに触発された問題について、さらに客観的な検証を加えていくことにより、ある考えが強度を増したものとなることが望ましい。

末筆になるが、このような機会を与えてくださった委員の先生方をはじめ、お忙しい中発表を引き受けてくださったテーブルのメンバー、きめの細かな準備によつて支えてくださった会場校の先生方や学生のみなさん、そしてテーブルに参加してくださった方々に心より感謝したい。

(きこし しゅんすけ／国文学研究資料館)